

リスクマネジメント・リスクガバナンス

リスクマネジメント

オリックスでは、事業活動に伴う多様なリスクを的確に把握し、適切に管理するため、全社的なリスクマネジメント体制を構築しています。取締役会は、リスクマネジメントを含む経営全般に関する最終的な監督責任を負い、全社的な方針や基本枠組みを決定します。代表執行役は、取締役会が定めた経営戦略に基づいた全社的なリスク選好に基づき、各事業部門の運営に必要なリスク管理体制を整備・維持する責任を負います。リスクへの対応方針は、CEOが議長および委員長を務めるエグゼクティブ・コミッティや投・融資委員会等での審議を経て決定します。

これら事業部門におけるリスク管理の状況については、内部統制関連部門が相互に連携しながら、モニタリングします。具体的には、事業部門において、毎年の経営計画策定時に自部門の事業特性に応じたリスクを踏まえて計画を策定します。さらに、毎年実施する自己検証プログラムを通じて、経営に重大な影響を与える可能性のあるリスクを特定し、その重要リスクへの対応が十分であるかを検証します。ERM部門は、信用リスク、市場リスク、流動性リスクおよびオペレーショナルリスク等の全社的なリスクについて継続的に評価するとともに必要に応じて改善支援を行います。これら手続きを通じて、全社的なリスクマネジメントの実効性を確保しています。

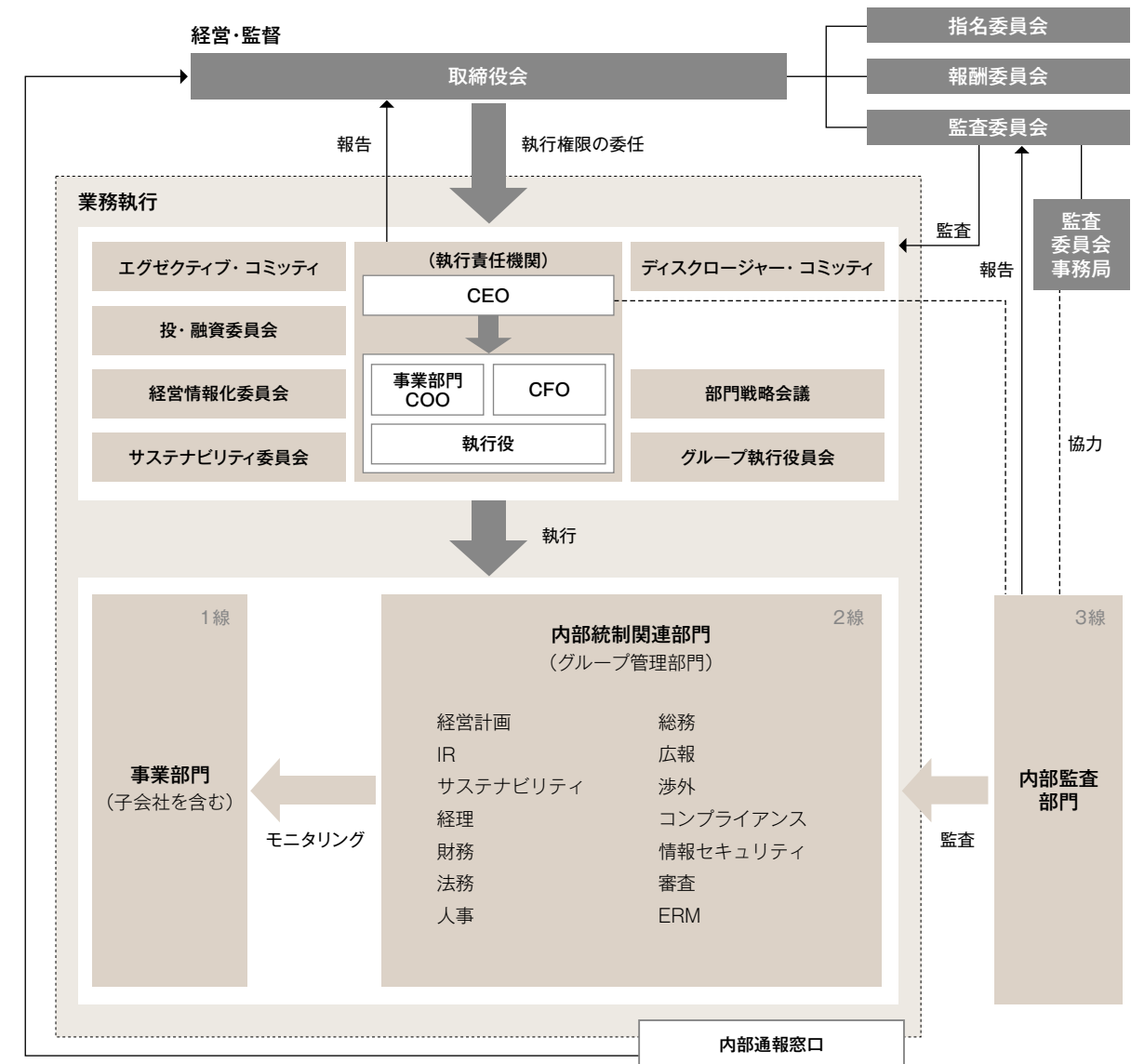
リスクガバナンス

オリックスでは、事業環境の変化に迅速かつ柔軟に対応し、効率的な業務執行と適正な経営を確保するため、リスク管理、コンプライアンス、グループ会社管理、監査体制などの観点を踏まえた内部統制システムを構築・運用しています。このリスクガバナンス体制と運用については、取締役会が最終的な責任を負い、全体方針を決定します。適正なリスクガバナンスを実施するために、三線防衛モデルに基づき以下の役割分担を定めています。

事業部門（第1線）は担当業務に関連するリスクを、内部統制関連部門が定める方針や枠組みに沿って特定・評価・管理します。内部統制関連部門（第2線）は、専門的かつ全社横断的な視点から事業部門のリスク対応状況をモニタリングし、必要に応じて改善を促します。内部監査部門（第3線）は、事業部門と内部統制関連部門から独立した立場で、リスクガバナンスプロセス全体の有効性を検証・評価し、不備があれば是正措置を提言します。また、外部通報窓口や内部通報窓口は、リスク事案の予兆を把握する仕組みとして、リスクガバナンスを補完します。

[📄 リスクマネジメント・リスクガバナンス](#)

■ 内部統制システムの概略図（一部付記）（2026年6月30日現在）



■ 主なリスクファクター

オリックスグループの事業活動や財政状態に影響を及ぼしうる主なリスクファクターと、その管理について、以下のようなものが挙げられます。

リスクファクター	リスク管理	リスク管理に関連する執行機関
外部環境に関するリスク	● 多角的な事業展開による収益構造の多様化、十分な流動性の確保により、健全な財務運営を継続できる体制の整備 ● 災害リスクマネジメント体制の整備 ● 気候変動リスク対応体制の整備 ■ 災害リスクマネジメント体制 ➡ P.52 サステナビリティ推進体制 ➡ P.57 TCFD 提言に基づく情報開示	エグゼクティブ・コミッティ サステナビリティ委員会
信用リスク	● 個別案件の審査時は、与信先の財務内容、キャッシュ・フロー、保全条件、採算性などを総合的に評価 ● 個別案件およびポートフォリオでの与信リスク管理手法の強化（十分な担保や保証の取得、業種や与信先の分散、潜在的にリスクの高いマーケットへのエクスポージャーをコントロール） ■ 投融資リスク管理体制	投・融資委員会
ビジネスリスク	● 事業や投資実行前の徹底したリスク分析の実施（シナリオ分析やストレステストの実施） ● 事業や投資実行後の定期的なモニタリングによる商品・サービスの品質改善、撤退コストの評価・検証 ■ 投融資リスク管理体制	投・融資委員会
市場リスク	● 資産・負債の統合管理体制の整備（市場リスクの包括的な把握検証体制、ヘッジ手段としてデリバティブ取引を利用）	エグゼクティブ・コミッティ
流動性リスク （資金調達に関するリスク）	● 調達手法の多様化推進 ● 手元流動性管理の強化（流動性リスクのストレステスト実施と対応策の整備、国や子会社ごとの流動性リスクの把握と対応策の整備）	エグゼクティブ・コミッティ
コンプライアンスリスク	● 適切なコンプライアンス体制の整備と高い倫理観を持ってコンプライアンスを実践する企業文化の醸成（コンプライアンスプログラムの策定と実施、社内規程の制定と周知活動によるコンプライアンス意識向上の推進、内部・外部通報窓口の設置） ■ コンプライアンス	エグゼクティブ・コミッティ サステナビリティ委員会
法的リスク	● 法令遵守および法的リスク管理体制の整備（法令遵守のための社内規程の制定、各事業に適用される法令の把握と法改正への適切な対応の実施）	エグゼクティブ・コミッティ サステナビリティ委員会
情報・サイバーセキュリティリスク およびITリスク	● 情報・サイバーセキュリティリスクおよびITリスク管理体制の整備（社内規程の制定、情報システムの脆弱性管理策やネットワーク防御などの技術的施策の実施、インシデント発生時の対応体制整備、システム障害発生リスク低減策の実施） ■ 情報セキュリティ体制	経営情報化委員会
オペレーショナルリスク	● 社内規程の整備、周知、教育 ● 業務執行に関わる体制の整備 - 財務報告に係る内部統制体制の構築 - 多様な人材を安定的に確保するための人事制度の整備と職場環境の整備 ● 監査部門によるオペレーショナルリスクのモニタリングを通じたリスク管理体制全般の継続的な強化 ● オペレーショナルリスクインシデントの対応・再発防止の体制と、リスク統制自己評価の整備 ■ 人的資本経営 ■ インシデント管理体制	エグゼクティブ・コミッティ サステナビリティ委員会

リスク管理の高度化 ―リスク情報の一元化・定量化・可視化と経営判断の支援―

オリックスは、事業ポートフォリオの拡大と多様化に伴い、リスク管理の高度化に取り組んでおり、リスク情報の一元化・定量化・可視化を軸に、グループ横断で統合的なリスク管理の強化に継続的に取り組んでいます。個別案件の入口審査からポートフォリオ管理までを一気通貫で捉え、リスクの変化を継続的に把握し、経営判断の支援、全社的なリスク管理の高度化に向けた基盤構築を進めることで、適切なリスクテイクを支え、持続的な企業価値向上につなげていきます。以下では、その実現に向けた取り組みを示しています。

総合リスク管理の実践プロセス

1 リスク関連情報の収集

事業部門および外部より
各種リスク情報を収集

事業・ポートフォリオ情報

市場・財務情報

外部環境情報

2 リスク情報の一元化・定量化・可視化

データ基盤とダッシュボードにより、リスクを横断的に把握

統合リスク管理基盤（データ基盤・ダッシュボード）

一元化

各事業部門に分散
した情報を一元的
に集約

定量化

リスク特性に応じた
指標を用いて定量化
し、多面的に把握

可視化

BI*1を用いてリスク
状況の推移を直感的
に可視化

- ・ポートフォリオ全体のリスク状況を横断的に把握
- ・リスクの分布・集中・変化を把握
- ・比較・分類により、優先課題を明確化
- ・ドリルスルー機能による詳細な情報把握

管理している主要リスクの分類

ポートフォリオ
リスク*2

市場リスク*3

流動性リスク*4

オペレーショナル
リスク*5

3 継続的なモニタリング・情報共有と 経営判断の支援

継続的にリスクを監視し、経営判断の支援につなげる

継続的モニタリング

ポートフォリオ全体のリスク状況の変化を継続的に
監視し、変化を早期に検知

情報共有・認識統一

マネジメントへのリスク情報のタイムリーな報告

経営判断の支援

経営層が必要な情報を把握し、適切な対応の
検討に活用する

リスク管理高度化の取り組み（今後の施策）

データ基盤の整備を進め、リスク情報の
集約・蓄積を推進

AI活用によるリスク識別・分析・
モニタリング機能の深化・進化

国内外のリスク情報を活用した
グローバルリスク管理の高度化

データ更新・集計プロセスの迅速化・
自動化

専門人材の育成と全社的なリスク管理の
実践を推進

ダッシュボードの画面イメージ（例）



- *1 Business Intelligence。企業が保有するデータを収集・分析・可視化し、経営や業務の改善・最適化に活用するための手法や概念。
- *2 投融資先の業況悪化やオリックスの事業運営状況の悪化により、投下資本の回収が困難となり、損失が生じるリスク。
- *3 金利・為替相場の変動により、将来の金利収益や金融商品の時価が変動し、損失が生じるリスク。
- *4 運用と調達の間隔のミスマッチや財務内容・市場環境の悪化により、必要な資金を確保できなくなる、または通常より著しく高い金利での資金調達を余儀なくされるリスク。
- *5 業務執行に係る内部プロセス、人、システムが適切に機能しないこと、または外生的事象によりオペレーションが適正に機能しなくなることから生じる損害、損失、不利益、または風評による影響を受けるリスク。